法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-03

ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』の総合的研究ー国際協働による西洋哲学研究の再構築

安孫子, 信 / ABIKO, Shin

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2014-06

Hosei University Repository

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３２０００７

研究課題名（和文）ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』の総合的研究－国際協働による西洋哲学研究の再構築

研究課題名（英文）A global study on Henri Bergson's Two Sources of Morality and Religion

研究代表者
安孫子　信（ABIKO, Shin）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：７０２１２５３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,700,000円、（間接経費）　4,110,000円

研究成果の概要（和文）：「人類は今、自らのなしとげた進歩の重圧に半ば打ちひしがれて呻いている。しかも、人類の将来が一にかかって人類自身にあることが、十分に自覚されていない」という言葉とともに、科学の時代における人類文明の危機を正面から論じたベルクソンの最後の主著『道徳と宗教の二源泉』(1932年)を、東日本大震災に襲われ福島原発事故の重大な後遺症に苦しむ日本の現状を見据えて、世界のベルクソン研究者との3年間の共同作業によって、思想史中で新たに位置づけ直すこと、そして現代に新たに意義付け直すことを遂行した。

研究成果の概要（英文）：'Mankind lies groaning, half-crashed beneath the weight of its own progress. Men do not sufficiently realize that their future is in their own hands.' With such words, Bergson's last main published work, " Two Sources of Morality and Religion"(1932) discusses the crisis of our civilization, sparked off exactly by the civilization itself. In view of the gravity of Fukushima nuclear power plant problems caused by the Great East Japan Earthquake, we've tried to do completely new reading of this bergsonian text and to re-position it in the history of ideas, successfully, through three years' intentionally international and intercultural joint research.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学　哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学史　フランス思想史　生の哲学　ベルクソン　道徳と宗教の二源泉　道徳　宗教　国際協働

Hosei University Repository

１．研究開始当初の背景
（１）内容と（２）様態の二つの面から背景を述べる。
（１）ベルクソン哲学の現代における再読はジル・ドゥルーズの『ベルクソン主義』（１９６６）から始まったと言える。ただベルクソンの４つの主著の最後となる『道徳と宗教の二源泉』（１９３２、以下『二源泉』）について同著はほとんど語らず、『二源泉』は言わば蚊帳の外に置かれた状態にあった。事実、「生の哲学」の立場から展開される『二源泉』の社会論は、「閉じた道徳」や「静的宗教」の分析において目覚ましい鋭利さを示すものの、それらにとって代わる「開いた道徳」や「動的宗教」においてそれが持ち出す「情動」や「神的人間」、「愛のエラン」や「神秘主義」といった諸概念がつまづきの石となって、積極的には読解されずに来たのである。
（２）ベルクソンにとどまらず西洋哲学の研究一般において、世界からの受信には優れているが、世界への発信、そして世界との対話にはあまり長けていないというのが長年これまでの日本の学会の傾向であった。発信や対話はほぼ日本語によってなされており、同じ日本人研究者間のものに留まっていた。その傾向の打破を、本研究に先立つベルクソン『創造的進化』をめぐる科研費課題研究（「ベルクソン『創造的進化』の総合的研究－受容史的背景を踏まえた西洋哲学研究の再構築 」２００７－１０）でわれわれ研究チームがすでにかなり手がけていた。世界のベルクソン研究者と対等の関係で共同研究を行う地場をかなり確保しえていた。

２．研究の目的
（１）内容と（２）様態の二つの面から述べる。
（１）上記に従い、『二源泉』を再読、再評価することが研究の目的であった。それは次の３つのレベルで考えられた。
①すなわちベルクソンに内的に、彼の先立つ３つの主著との関係において、つまりはベルクソン思想の内的展開において、それを位置づけることが目指された。
② 次に、『二源泉』を思想史、哲学史において位置づけ直すことが目指された。この場合、コンテキストを絞ってフランス１９世紀を選び、『二源泉』がフランス１９世紀をどう受け継ぎ、どう乗り越えるものであったのかを主に問題としていった。
③ 最後に、『二源泉』が、人類が今日地球規模で直面している、科学技術の影の問題、さらに、宗教対立や民族紛争激化といったグローバル化の影の問題に、どう応えうるものかを問うこと、が目指された。
（２）やはり上記に従い、「国際協働」をさらに質において高め、また幅において拡大することが目指された。そして、この「国際協働」の促進も、次の３つのレベルで考えられた。
④まず、狭く研究者間、アカデミズムのレベルで。
⑤ 次に、市民をも巻き込み、社会に広くうったえかけていくレベルで。
⑤最後に、学生、若手研究者を巻き込み育てるレベルで。
以上の３つである。

３．研究の方法
やはり（１）内容と（２）様態の二つの面から述べていく。
（１）年度を通じて秋に一度、海外から、そして国内から、ほぼ同数（１０名前後）の研究者を招聘し（国内からの招聘者は、われわれ研究チームのメンバーをも含む）、３－４日にわたって、一貫したテーマをめぐってのシンポジウムを開催し、そこで徹底討論を展開することが、本研究のメインのイヴェントであった。その際シンポジウムの公用語は（ほぼ）フランス語とし、会場地を問わず、発表討議はすべて（ほぼ）フランス語で行われるようにした。シンポジウムに先立つ期間は、シンポジウムの広い意味での準備に当てられた。とくに様々な読みあわせを前もって行い、シンポジウムの提題者としてふさわしい海外研究者の人選が行われていった。他方、シンポジウム後には反省と検討の会を行ってシンポジウムでの成果の確認を行い、それを報告集（アクト）の出版、しかも外国におけるフランス語での出版に結びつけていくことが模索された。このような方法的手続きが３カ年にわたり、第１年目には主に①③のテーマを巡って、第２年目には主に①②のテーマを巡って、そして第３年目には総集として①②③のテーマを巡って、行われていった。
（２）「国際協働」ということでの方法的手続きは以下の様なものである。まず④に関しては、すでに前回の科研費課題研究で培われていた、フランスにおけるベルクソン研究の中心者の一人であるフレデリック・ヴォルムス（パリ ENS）が率いる研究チームとの協力関係を、さらに強固なものとしていった。こちら側としても、研究を一貫してフランス語ベースで行うことを受け入れて、研究活動そのものにおいても、それにまつわる実務的な事柄においても、フランス側とのコミュニケーションで停滞が生じないように努めた。またそうしつつ、学問的に対等性が保たれるようにも努力していった。言語の面でのこの対応は⑤に関して、フランスで市民との関係構築を図る際にも役立つものであった。他方で、この言語の選択は、言うまでもなく、日本においては逆に多大な困難を齎すものとなった。それを補うために、日本でのシンポジウムの際には、前もってあらゆる発表原稿の日本語訳を用意しておき、それを会場で配布することを行っていった。そして⑥に関してであるが、ここでも、すべてフランス語でという言語原則は維持されていった。具体的には、毎回のシンポジウムの際に、プレイヴェント

Hosei University Repository

として、若手日本人研究者によるワークショップを開催し、海外の専門研究者の前で、フランス語で研究発表を行う機会を提供した。また加えて、ヨーロッパ連合の国際教育プログラムであるエラスムス・ムンドゥス修士課程＜ユーロフィロソフィ＞が毎年法政大学で開く一セメスター分の公式授業の過半を、われわれ研究チームが引き受け担当することとともし、ヨーロッパから派遣の修士の学生たちに、フランス語で、主にベルクソンを内容とする授業を行っていった。

４．研究成果

（１）まず２０１１年１０月に法政大学と京都大学、九州産業大学で「ベルクソンと災厄ー今、『道徳と宗教の二源泉』を読み直す」と題するシンポジウムを、次に２０１２年１０月に法政大学と京都大学で「反時代的考察ーベルクソンと１９世紀フランス哲学」と題するシンポジウムを、最後に２０１３年１１月にパリ国際大学都市日本館で「最終的考察ー『道徳と宗教の二源泉』をめぐって」と題するシンポジウムを、参加研究者と言語使用の上記の原則に則って、成功裏に開催することができた。加えて、それの延長線上のこととして、まず、前回科研費課題研究シンポジウム（２００７年）に関わるものであったが、それの報告集 ”Dissémination de l’Évolution créatrice de Bergson”（2012, OLMS）、次いで２０１１年シンポジウムの報告集“Bergson, le Japon, la catastrophe”（2012,Annales bergsoniennes VI, PUF）を、それぞれフランス語で、独仏の出版社から出版することができた。残る２０１２年と２０１３年シンポジウムについても、報告集の出版をドイツ OLMS 社が引き受けてくれることで、すでに交渉済みである。

以上のいわば外的成功に加えて、より重要な事として、シンポジウムでは内容的にも多大の成果を挙げることができた。そのいくつかに触れれば、以下のようなことになる。

①（ベルクソン哲学に内在的研究成果）ドゥルーズの『ベルクソン主義』によって『二源泉』のベルクソン内での位置づけが試みられた（檜垣立哉（大阪大学））。ベルクソンにおける「開き」と「動」との差異が論じられた（セバスティアン・ミラヴェット（トゥルーズ第２大学）。情動概念を通して『二源泉』の新たな位置づけが試みられた（村山達也（東北大学））。悲劇概念を手がかりに『笑い』と『二源泉』との距離が論じられた（安孫子信（法政大学））。人格概念を手がかりに『二源泉』の位置づけが試みられた（平井靖史（福岡大学）、増田靖彦（龍谷大学））。抵抗概念から『二源泉』が論じられた（チプリアン・ジェレル（クーザ大学））。

②（思想史上の研究成果）社会概念でニーチェとの対比が行われた（アルノー・フランソワ（トゥールーズ第２大学））。種概念で田辺元やフランス社会学との対比が行われた（杉村靖彦（京都大学））。生の哲学で西田幾多郎との対比が行われた（張政遠（香港中文大学））。習慣概念でラヴェッソンや西田幾多郎との対比が行われた（黒田昭信（セルジ・ポントワーズ大学））。「即」の概念で西田幾多郎との対比が行われた（小林敏明（ライプチヒ大学））。スピリチュアリズムとの比較が行われた（村松正隆（北海道大学）、アンヌ・ドゥヴァリユ（カーン大学）、クレール・マラン（セルジ・カストーレ高校））。プラグマティズムとの比較が行われた（ステファン・マデルリユ（リヨン第３大学））。コントとの比較が行われた（伊達聖伸（上智大学））。タルトとの比較が行われた（ピエール・モンテヴェロ（トゥールーズ第２大学））。ラニョーとの関連付けが行われた（合田正人（明治大学））。個人主義をめぐってデュルケムとの対比が行われた（小関彩子（和歌山大学））。

③（『二源泉』に見いだされる議論や概念が持つ現代的意義ということでの研究成果）権利概念の重要性が指摘された（アレクシス・ルフェーブル（シドニー大学））。神秘精神の伝播が今日の問題として論じられた（アルノー・ブアニッシュ（リール第３大学））。仮構機能の概念の重要性が指摘された（伊東俊彦（相模女子大学）。それが語る民主主義概念の位置が論じられた（菊谷和宏（和歌山大学））。ベルクソン社会論での笑いの意味が論じられた（中村弓子（お茶の水女子大学））。カタストロフィの位置づけが論じられた（ポール・デュムシェル（立命館大学）、フレデリック・ヴォルムス（パリ ENS））。レヴィナスを援用しつつそこでの存在論が論じられた（ヨハネス・シック（ヴュルツブルグ大学））。バタイユを援用しつつそこでの神秘主義が論じられた（岩野卓司（明治大学））。技術と神秘主義の関係が論じられた（ジスラン・ヴァテルロ（ジュネーブ大学））。政治と神秘主義の関係が論じられた（フロランス・ケメックス（リエージュ大学））。戦争の問題が論じられた（カテリナ・ザンフィ（ボローニャ大学））。記憶の問題が論じられた（藤田尚志（九州産業大学））。

（２）「国際協働」ということでの成果もやはり先の３つのレベルに即して以下列記していきたい。

④のアカデミックなレベルでの成果の主要なものは、すでに（１）で触れたシンポジウムの成功がそれに当たっている。３回のシンポジウムに延べで２８人の海外の研究者が登場した。中でも、２０１３年のシンポジウムはパリで、われわれ研究チームが主催する形で実施された。それに当たっては、海外研究者たちからは、ただの参加以上の協力を得る必要があったが、それを事実得ることもできた。そのことは、われわれの研究が、本家でも認知され一定評価されていることの証であったろう。

⑤の社会との接触ということでは、成果として、毎回のシンポジウムが公開でなされて

Hosei University Repository

おり、毎回、相当数の一般市民、学生の聴講参加が得られた事実を挙げえよう。参加者は質疑応答にも毎回、活発に参加してくれた。さらに特別なこととして、２０１３年のパリでのシンポジウムの後、それに引き続く形で、われわれ研究チームが全体として、リールでの伝統の「シテフィロ」に招かれることがあった。リールでは４回のパネルディスカッション（’Qu’est-ce que la philosophie japonaise?’,’Fudo, le mileu humain’, ‘Autour de l’école de Kyoto’, ‘Le Japon et la catastrophe’）に参加して、市民の聴衆を前に、チームとして発表を行った。ここでの発表は必ずしもベルクソンに直接関わるものではなかったが、われわれが全体として招かれたのは、ベルクソン研究でのわれわれのこれまでの実績ゆえのものであると考えている。

⑥若手研究者や学生育成の、「国際協働」に絡めての成果ということでは、まず、シンポジウム毎に、若手研究者に開かれたワークショップを、成功裏に開催することができたことを挙げうる。パリでのシンポジウムの際には、パリ留学中の日本人学生に参加を呼びかけてワークショップを組織したが、短期間で十分の数の発表参加者を得ることができた。ワークショップではベルクソンが中心とは言え、多様なテーマが扱われて、若手研究者が、もっぱらフランス語で発表や質疑応答を行っていった。その際、言語運用上で困難をきたす学生は皆無で、日本人研究者の海外への外国語での発信力を高めるという本研究の当初の目論見は、上首尾に果たされつつあると実感された。また他方で、われわれ研究チームは既述のようにエラスムス・ムンドゥス修士課程＜ユーロフィロソフィ＞の法政大学での展開で授業責任を担っているが、ここでも、日本人学生のこのプログラムへの本格参加数の増という傾向が見られており、成果を指摘しうる。このヨーロッパ連合のプログラムにわれわれチームがそもそも関与することになったのも、ベルクソン科研費課題研究での実績がそれ以前にあったからであった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）
①杉村靖彦、「種の論理」と「社会的なもの」の問いー田辺、ベルクソン、フランス社会学派、査読無、日本哲学史研究１１巻、２０１４，（印刷中）
②安孫子信、哲学と宗教ー西周の宗教観、国家アイデンティティと宗教、査読有、国際日本学研究叢書２０号、２０１３，９５－１１６
③金森修、＜変質した科学＞の時代の宗教、宗教研究、査読有、宗教研究８７巻、２０１３，８１－１０６
④合田正人、レヴィナスとラカンースピノザの徴しのもとに、査読有、思想、１０８０号、２０１４，２８８－３０８
⑤Hisashi Fujita, Bergson ou Deleuze, À quoi reconnait-on le vitalisme?, 査読有, Annales bergsoniennes VI, 2013, 413-427
⑥檜垣立哉、ドゥルーズにおけるヒューム経験の超出と想像力ー構想力の役割、査読有り、思想、１０５２号、２０１１，１８１－１９４

〔学会発表〕（計　１２　件）
①金森修、＜反自然性＞の定位としての尊厳、日本生命倫理学会、２０１３年１２月１日、東京大学（東京都）
②合田正人、Pathos de la ‘cloture’- Lecture critique des Deux sources chez Hajime Tanabe シンポジウム「最終的考察ーベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』をめぐって」、２０１３年１１月８日、パリ国際大学都市日本館（フランス）
③杉村靖彦、La logique de ‘l’espérance’ et la question du ‘social’ – Tanabe, Bergson et l’école française de la sociologie, シンポジウム「最終的考察ーベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』をめぐって」、２０１３年１１月８日、パリ国際大学都市日本館（フランス）
④安孫子信、La religion de l’Humanité, est-elle statique ou dynamique ?、シンポジウム「最終的考察ーベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』をめぐって」、２０１３年１１月７日、パリ国際大学都市日本館（フランス）
⑤藤田尚志、Au mlieu du chemin. La double frénésie et la politique, シンポジウム「最終的考察ーベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』をめぐって」、２０１３年１１月６日、パリ国際大学都市日本館（フランス）
⑥檜垣立哉、Les Deux sources dans Le bergsonisme de Deleuze, シンポジウム「最終的考察ーベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』をめぐって」、２０１３年１１月６日、パリ国際大学都市日本館（フランス）
⑦金森修、認識論とその外部―汚染と交歓、日本哲学会、２０１３年５月１１日、お茶の水女子大学（東京都）
⑧Hisashi Fujita, Foncer le fond de la mémoire. La déconstruction du ‘nucleaire’ et le futur des Humanités, Colloque’ La philosophie de la catastrophe: repenser les Humanités après Fukushima’, 15/03/2013, Fondation allemande a Paris（フランス）
⑨Hisashi Fujita, Télépathie: recherches psychiques et métapsychologie, Colloque ‘Bergson et Freud’, 22/11/2012, ENS a Paris （フランス）
⑩安孫子信、Entre la sociologie et la biologie-Bergson et Comte、シンポジウム「反時代的考察ーベルクソンと１９世紀フランス哲学」、２０１２年１０月１５日、法

Hosei University Repository

政大学（東京都）
⑪合田正人、Herméneutique de la mémoire pure, シンポジウム「ベルクソンと災厄－今、『道徳と宗教のニ源泉』を読む」、２０１１年１０月２９日、九州産業大学（福岡県）
⑫安孫子信, Entre la tragédie et le désastre, シンポジウム「ベルクソンと災厄－今、『道徳と宗教のニ源泉』を読む」、２０１１年１０月２４日、法政大学（東京都）

〔図書〕（計　１１　件）
①合田正人、PHP 研究所、田辺元とハイデガー、２０１３，３１３
②合田正人、河出書房新社、幸福の文法、２０１３，３６８
③安孫子信、松田克進、出口康夫、京都大学学術出版会、デカルトをめぐる論戦、２０１３，３４８，１－３４８
④金森修（編）、慶応義塾大学出版会、エピステモォジー－２０世紀のフランス科学思想史、２０１３，４９０
⑤Michel Dallisier, Shin Nagai, Yasuhiko Sugimura, Vrin, Philosophie japonaise-Le néant, le monde et le corps, 2013, 471
⑥Shin Abiko, Arnaud François, Camille Riquier, PUF, Annales bergsoniennes VI Bergson, le Japon, la catastrophe, 2013, 462, 1-462
⑦Alexis Lefebvre, Hisashi Fujita, Duke University Press, Bergson, Politics and Religion, 2012, 352, 1-352
⑧檜垣立哉、青土社、ヴィータ・テクニカ、２０１２，４８６
⑨檜垣立哉、講談社、子供の哲学、２０１２，２１９
⑩金森修、東京大学出版会、合理性の考古学、２０１２，５２５
⑪安孫子信、杉山直樹、藤田尚志、OLMS, Disséminations de l’Èvolution créatrice de Bergson, 2012, 272, 1-272

〔その他〕
ホームページ等
http://research.cms.k.hosei.ac.jp/bergson/ja/node/28（科研費課題研究のＨＰ）

http://www.citephilo.org/sites/citephilo.org/files/programmes_pdf/Programme_Citephilo_2013.pdf（リール「シテフィル」プログラム）

http://erasmus.ws.hosei.ac.jp/index.php（エラスムス・ムンドゥス＜ユーロフィロソフィ＞法政プログラムのＨＰ）

６．研究組織
(1)研究代表者
安孫子　信（ABIKO, Shin）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：70212537

(2)研究分担者
杉村　靖彦（SUGIMURA, Yasuhiko）
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：20303795

(3)研究分担者
合田　正人（GODA, Masato）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：60170445

(4)研究分担者
檜垣　立哉（HIGAKI, Tatsuya）
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：70242071

(5)研究分担者
藤田　尚志（FUJITA, Hisashi）
九州産業大学・国際文化学部・講師
研究者番号：80552207

(6)研究分担者
金森　修（KANAMORI, Osamu）
東京大学・教育学研究院・教授
研究者番号：90192541